

2020年12月13日
降臨節第3主日
東京聖三一教会

イザヤ 65:17-25
1テサ 5:16-28
ヨハネ 1:6-8、19-28

あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる

今日、ご一緒に読んだテサロニケ書には多くの信仰者が心の中に納めているみ言葉がこのように記されています。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」(1テサ 5:16-17)

ところで人々がどのようにしていつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝することができるのでしょうか。これは聖人のように生きていく人だけができることではないのでしょうか。なぜこのように難しいことを勧めるのでしょうか。そのわけを使徒パウロはこのように教えてくれています。

「これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」(1テサ 5:18)

ところで、使徒パウロが言うこの喜び、祈り、感謝は、信仰を持たない人たちが考えることとは少し異なる意味があります。それでは、その異なる意味を見てみましょう。

漢字の中には、お金を意味する「金」という漢字を3つ使って一つの漢字になるものがあります。「鑫」という漢字で、「キン」と読みます。中国人はこの字を「嬉しい」という意味で使っています。「お金が多ければ嬉しくなる」という意味かもしれませんが、けれども、お金が多いからといって必ずしも嬉しいわけではありません。ある人々にとっては権力とか名誉が、またある人々にとっては面白い出来事が、嬉しいことであると思います。けれども信仰者にとって最も大切に思われる喜びは、「神様にあって生きていく人生の喜び」です。また、私たちが神様のみ手によって創造され、幸せに生きていくためにこの世に遣わされたという真実を通して感じる喜びです。これは「人生の根源についての喜び」とも言えるでしょう。

このような喜びがあったから、イエス様の当時の弟子たちは最高法院に連れて行かれ、迫害を受けながらも喜びました。その時の状況は使徒言行録にこのように記されています。

「使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行きました」(使徒 5:41)

それだけではありません。旧約時代の信仰者たちは自分の人生が破産に至っているにもかかわらず、「神様はともにおられる」という事実だけで喜びました。その姿がハバクク書にこのように記されています。

「いちじくの木に花は咲かず／ぶどうの枝は実をつけず／オリーブは収穫の期待を裏切り／田畑は食物を生ぜず／羊はおりから断たれ／牛舎には牛がいなくなる。しかし、わたしは主によって喜び／わが救いの神のゆえに踊る。」(ハバ3:17-18)

どのようにして侮辱と迫害、試練と絶望の中で喜ぶことができるのでしょうか。信仰を持たない人にとっては理解しがたいことです。けれども信仰者は、侮辱と迫害、絶望と試練にもかかわらず、神様が私たちに恵みを与えてくださり、ついには救いへ導いてくださるということを知っていますし、また信じているから、喜ぶことができるのです。そして、このような侮辱と迫害、試練と絶望の中に見つけた喜びこそ真の喜びであり、この喜びを得るために努力することが信仰者の人生であると言えるでしょう。もちろん、このような喜びを得る過程は難しいかもしれません。けれども神様が勧めてくださる喜びであるから黙々と努力するわけです。これは一生の課題であるかもしれません。それゆえ、私たちにとって祈りが切実なのです。使徒パウロが、絶えず祈るように勧めるわけもここに 있습니다。祈りを通して私たち自身が神様の中に生きているということを確認することができますし、祈りを通してこのような喜びを味わった人にとってはすべてが成し遂げられたという気持ちになるからです。

もちろん、このような喜びは私たち人間の努力だけで得られるものではありません。それは全く神様の功によるものです。けれども、私たちは神様のみ手によって創造された人々なので、神様が私たちに恵みを与えてくださるということだけは確かです。今日ご一緒に読んだテサロニケ書にはこのように記されています。

「どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてくださいます。」(1テサ5:23-24)

ですから、私たちはどんなことにも感謝することができるのです。

けれども、考えてみると、私たちは神様のみ形に創造されたので、私たちの中に喜びの源も込められています。しかし、多くの人々はそれを忘れて暮らしています。日常生活が忙しいからかもしれません。もしかすると、この世が与える喜びに惑わされているからかもしれません。私たちは、真の喜びは神様が与えてくださる喜びであり、また私たちの胸の中にも見出すことができるということを忘れてはいけません。教会が、聖書を絶えず読み、祈ることを勧めるのも、自分の中にある喜びの源を見出す助けとなるためでもあります。

今日ご一緒に読んだ福音書には、ファリサイ派の人々が洗礼者ヨハネのアイデンティティを尋ねる様子が記されています。けれども一方でこの内容は、「自分の胸の中から喜びの源

を見つけなさい」というメッセージにもなります。それではそれを見てみましょう。

イエス様の当時、多くの人々が苦しみと試練の中に暮らしていました。けれども、彼らには希望がありました。それは神様が救ってくださるという約束でした。人々は、神様の約束を信じて、メシアを待ち望んでいました。けれども、皆がメシアを待ち望んでいたわけではありません。この世のものを通して喜びと満足を楽しんでいる人々はメシアが必要ないと思っていたからです。けれども多くの人々は洗礼者ヨハネを訪れ、洗礼を受けました。すると、ファリサイ派の人々は緊張しました。彼らは洗礼者ヨハネが自分たちの社会的地位を揺さぶると思っていたからです。そこで祭司とレビ人をヨハネのもとへ遣わして、ヨハネが誰なのかを調べさせました。祭司とレビ人はヨハネに様々な質問をしました。けれども、彼らは自分たちが望んでいた答えを得られませんでした。なぜでしょうか。彼らの話に注目してみてください。彼らはこのように言うのです。

「わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。」(ヨハネ 1 : 22)

祭司やレビ人は自分たちに本当に必要なこと、真の喜びを見つけようとしませんでした。ただ、自分たちを遣わした人たちに答えを持ち帰るためだけに質問をしたのです。すると洗礼者ヨハネはこのように意味深い話をするのです。

「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。」(ヨハネ 1 : 26)

これは、「イエス様がすでにこの世に来られた」という意味です。けれども、もう一方では、人々は各々の胸の奥底にある存在を通して真の喜びを得られるという意味でもあります。真の喜びの根源は、各々の胸の中にあります。すべての人々は神様のみ手によって創造された大切な存在であり、それぞれの胸の中には大切な神様のみ姿が込められています。この真実に気づき、むねの中にある神様のみ旨に従って生きていけば、私たちの人生は自然と感謝と賛美の人生になるでしょう。

「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。」(ヨハネ 1 : 26)

洗礼者ヨハネのこの話についてもっと深く考えてみると、この言葉は私たちのためのみ言葉でもあります。つまり、私たちの中にあるものを通して喜びを見つけなさいという意味です。今日一緒に読んだイザヤ書にはこのように記されています。

「見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして／その民を喜び楽しむものとして、創造する。」(イザヤ 65:18)

そしてこのようにも記されています。

「彼らは、その子孫も共に／主に祝福された者の一族となる。」(イザヤ 65:23)

このことを通して私たちはすでに祝福にあずかる人生を生きる存在であるということが分かります。神様が与えてくださったこのしるしが私たちのうちにあります。ですから、私たちはいつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝しながら人生を過ごすことができるの

です。

降臨節は、クリスマスと再び来られる主を待ち望みながら心の準備をする期間です。この心の準備の中で何より必要なのは、喜び、祈り、感謝かもしれません。たとえ私たちが難しく大変な状況におかれていても、事実そういう状況にありますが、神様が私たちを創造なさり、私たちの中に喜びも与えてくださったのですから、信仰を持って生きていけば、神様が私たちの祈りをお聞きくださり、真の喜びをも与えてくださるでしょう。

この一週も神様の中にあっても喜びと感謝の気持ちが満ち溢れる日々になりますように心からお祈りいたします。